



第八高等学校

—新制名古屋大学の包括学校①—

山口拓史

第八高等学校

―新制名古屋大学の包括学校①―

山口 拓史

目 次

はじめに	2
一、旧制高等学校	3
二、第八高等学校の創設	9
三、八高の教育と学生生活	17
四、戦時下の八高	34
五、名古屋大学への包括	41
六、八高会―第八高等学校同窓会―	47
おわりに	51

はじめに

第八高等学校（以下、八高ともいう）は、国内で八番目の高等学校として一九〇八（明治四一）年四月に設置されました。

高等学校といっても戦前の高等学校は今日存在している戦後の高等学校とはかなり異なっています。本書で取り上げる第八高等学校のような戦前の高等学校は通常、旧制高等学校（旧制高校）と呼ばれます。一方で、今日存在している高等学校は旧制高校と区別するために新制高等学校（新制高校）と呼ばれることがあります。

両者の基本的な違いを一言で表現すれば、旧制高校が高等教育機関であるのに対して、新制高校は後期中等教育機関であるということになります。今日においても高等教育段階と中等教育段階はさまざまな点で異なっていますが、戦前における高等教育機関は紛れもなくエリート養成機関であり、中等教育段階以下の教育機関とは比較にならないほどの格差がありました。

本書では、新制の名古屋大学に包括された学校の一つである第八高等学校に焦点をあて、同校の創設経緯から廃止に至るまでの歴史を中心に取り上げます。

一、旧制高等学校

◆戦前における学校制度

戦後の日本における学校制度は、一九四七（昭和二二）年に制定された教育基本法と学校教育法に基づくもので、小学校・中学校・高等学校・大学の各修業年限にちなんで六・三・三・四制と呼ばれる学校制度になっています。この学校制度では、初等教育段階を小学校が、中等教育段階を中学校と高等学校が、また高等教育段階をおもに大学が担うことになっており、初等・中等・高等の三つの教育段階は明確に区分されています。

これに対して戦前の学校制度は、これら三つの教育段階は今日のように明確には区分されていませんでした。たとえば戦前教育制度の拡充期とされる大正期の学校制度体系（一九一九年）を例にみると、尋常小学校（六年）が初等教育に相当し、尋常小学校より上の段階（中学校・高等女学校・実業学校など）が中等教育を担い、また高等学校・専門学校や大学が高等教育を担うという形になっていました（図1参照）。

◆高等中学校

戦前の学校制度では、初等・中等・高等の各段階の学校がそれぞれ個別の勅令によつて規定され、とても複雑な制度になっていました。たとえば一八八六（明治一九）年に公布された中学校令では中学校は尋常中学校と高等中学校の二種に分けられ、高等中学校は全国（北海道と沖縄を除く）を五区に分けた各区に官立学校として一校が設けられました。第一（東京）、第二（仙台）、第三（京都）、

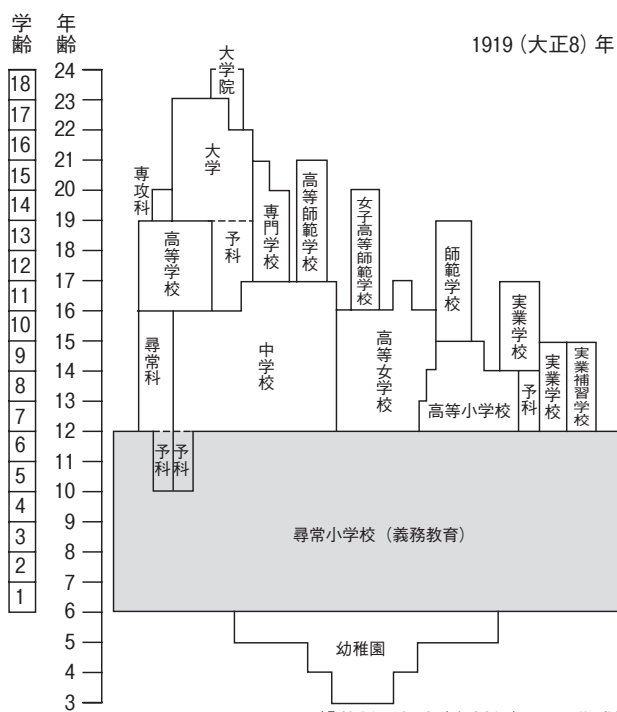


図1 1919（大正8）年の学校系統図（抜粋）

第四（金沢）、第五（熊本）の各高等学校（カッコ内は各校の所在地名）がそれにあたります。

この高等学校は、農業・工業・商業等の各分野における指導者養成のための実務教育を行うとともに、高等段階の教育を受けるために必要とされた基礎教育を行うという二つの目的をもつ学校として設置されたものでした。

◆高等学校と大学予科

しかし、実際の高等学校では必ずしもその設置目的の通りにはなりませんでした。現実には高等学校における実務教育が次第に衰退し、帝国大学進学のための予備教育機関としての性格が強くなったのです。その後、一八九四（明治二七）年には高等学校令が公布され、この勅令によって高等学校が高等学校に改称されて制度上独立することになりました。

高等学校令（一八九四年勅令第七五号）

第一条 第一高等学校、第二高等学校、第三高等学校、第四高等学校及第五高等学校ヲ高等学校ト改称ス

第二条 高等学校ハ専門学科ヲ教授スル所トス但帝国大学ニ入学スル者ノ為予科ヲ設クルコ

トヲ得

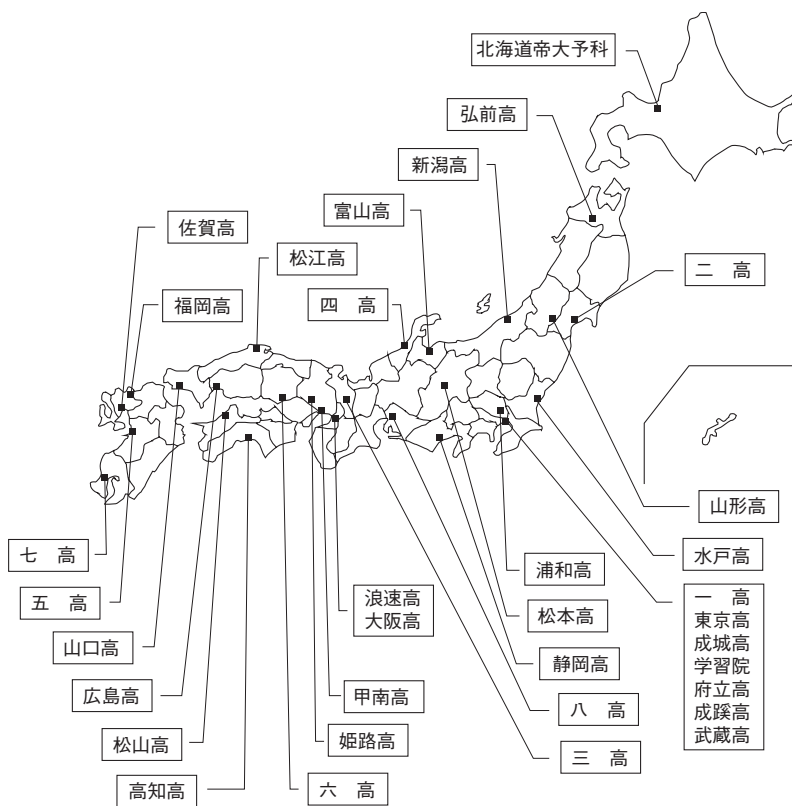
右の条文からもわかるように、高等学校には専門学科を教授する専門部（四年）と帝国大学進学者のための大学予科（三年）が設けられました。これは、当時の欧米の地方大学制度を参考にしたものと考えられています。ただし、新たな高等学校の基本的な性格は高等学校の時代とあまり変わらず、期待どおりに専門部が発展することはありませんでした。

なお、大学予科については、法科大学・文科大学の志望者向けの第一部、工科大学・理科大学・農科大学の志望者向けの第二部、医科大学志望者向けの第三部に分けて予備教育が行われるようになりました。

◆全国三八校のエリート養成学校

以上、旧制高等学校の成立経緯や性格について、ごく簡単に述べました。ところで、戦前期の旧制高校の数についてはいくつかの数え方があります。

本書では旧制高等学校資料保存会の考え方に基づいて帝国大学に直接的に結びついていた三八校としておきます（図2参照）。



※上記以外に戦前期日本統治下の台湾、朝鮮、関東州に、台北高、京城帝大予科、旅順高、台北帝大予科が設置されていた（設置年順）。

図2 旧制高等学校分布図

◆新高等学校令による制度改革

一九一八（大正七）年一二月、臨時教育會議（一九一七年設置、内閣直属の諮問機関）の答申に基づいて、高等学校令（勅令第三八九号）が新たに制定されました。臨時教育會議は、第一次世界大戦後における近代教育制度全体におよぶ抜本的な改革の道すじを示しましたが、とりわけ明治期以降「多年ノ懸案ニシテ緊急ノ解決ヲ要スルモノ」とされた高等学校の制度改革についても節目となるような答申を行いました。

臨時教育會議の答申をうけて制定された新高等学校令では、高等学校の目的が男子の高等普通教育を完成することとされ、その設置形態は官立・公立・私立のいずれかによるものとなりました。また、修業年限は尋常科四年・高等科三年の七年制が原則とされ、例外的に高等科のみを設置することもできるとされました。さらに、特別の必要がある場合は七年制高等学校に予科を置くことが認められました。

なお、この新高等学校令に基づいて、第八高等学校を含むいわゆるナンバーズスクールは高等科のみを設置する高等学校となりました。

二、第八高等学校の創設

◆創設の背景

一八九八（明治三一）年一二月、官立高等学校を一枚増設することが帝国議会で議論されました。官立高等学校の設置（増設）は、高等学校令（一八九四年公布）以前の中学校令（一八八六年公布）に基づいて、第一から第五までの高等中学校がほぼ同時に設置されて以降およそ一〇余年ぶりのことでした。

これをうけて愛知県、岡山県、広島県、香川県において六番目の官立高等学校を誘致する運動が行われましたが、最終的には岡山県と広島県による激しい誘致合戦が展開されました。第六高等学校の誘致をめぐる両県の運動は、一九〇〇年三月に終止符が打たれました。勅令によって、岡山県への第六高等学校の設置が布告されたためでした。

なお、この六高設置をめぐる愛知県の誘致活動については『愛知県議会史』にも具体的な記述はなく、その詳細は明らかではありません。

◆愛知県による誘致活動①

愛知県に官立高等学校を誘致するための活動は、一九〇〇（明治三三）年頃から具体化しました。

一八九九年三月招集の臨時県会では「第七高等学校設置に関する寄付金の件」が提案されました。「第七高等学校を本県下に設置せらるゝ場合に於ては其建設費の内へ金十万円及主務大臣の指定により校地凡そ二万五千坪を買収し国庫に寄附するものとす」という内容の同議案は、審議の結果、即日可決されました。この議案が提案された背景には、岡山に第六高等学校が設置されることになったのち一九〇〇年度にも第七高等学校が設置されるという情報を得たため、七高誘致に向けた追加予算措置を早急に行うねらいがあつたのです。

また、一九〇〇年一二月招集の通常県会では、翌年一月に「高等学校増設位置に関する件」として内務大臣あての意見書が審議され、満場一致で即日可決されました。この意見書では、いまだ設置場所が明らかになつていなかった七高について、「本県ノ地タル実ニ東海ノ地枢ニ位シ、交通至便四方ノ学ヲ收容スルニ於テ最適當ニシテ教育上裨益^{ひえきすくなく}カラザルヲ信スルニ因リ、該校位置ヲ本県下ニ指定セラレンコトヲ望ム」とし、そのための建設費を国庫に寄付する用意があることを述べて誘致を行っています。

以上のように、愛知県では約二年にわたる誘致活動を行いました。一九〇一年一月に第七

高等学校は鹿児島県に設置されることが決定されたのでした。

◆愛知県による誘致活動②

第七高等学校の誘致が実現しなかった愛知県では、その後数年の間、官立高等学校誘致に向けた目立った活動は行われませんでした。しかし、一九〇五（明治三八）年三月に名古屋高等工業学校（現在の名古屋工業大学の前身校）が設置されたことを契機に、愛知県では再び官立高等学校誘致に向けた機運が高まったのでした。

すなわち愛知県では、当時すでに計画していた県立第五中学校建設のための予定地（約四万九五〇〇㎡）の提供と校舎等の建設設備費用（約二八万六六〇〇円）の寄付を条件に、第八高等学校の誘致に動き出しました。こうした動向に対して当時の新聞は、「高等学校の設立」と題した論説で「愛知県否^{いやむし}寧ろ中部日本の文教の機関に一段の進歩を加へたるものといふ可^べし」（『扶桑新聞』一九〇七年二月二十九日付）と述べています。

当時、八高設置については愛知県のほかに静岡県と長野県が誘致運動を行いました。一九〇七（明治四〇）年一月、愛知県は通常県会において翌一九〇八年度からの三年間に合計二八万六五六五円二銭を国に寄付する議案を可決しました。また愛知県は、同年一二月に行われた文部省による実地検分を踏まえて、愛知郡呼続^{よひつぎ}町大字瑞穂字神ノ内周辺の土地を買収すること

になりました。ただし、この土地は、翌一九〇八年四月に愛知県への八高設置が確定した際、文部省の意向によって第五中学校用地として利用されることになり、愛知県は愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑周辺の第五中学校敷地（約五万四〇〇〇㎡）の買収費用（約一万三九〇〇円）を国に寄付することになりました。

◆八高の創設

一九〇八（明治四一）年三月二日、「文部省直轄諸学校官制中改正」（勅令第六八号）が公布され、翌四月一日に第八高等学校が創設されました。それは、愛知県による官立高等学校誘致活動が本格化してからちょうど九年後のことでした。なお、同年四月八日には文部省令第六八号によって八高に大学予科が設置されています。

八高の具体的な開校準備は、文部省内に設けられた仮事務所において創設後直ちに開始されました。この事務を任されたのが同年四月に八高校長事務取扱に任命された大島義脩よしなが文部省視学官で、この大島が同年六月に初代の第八高等学校長に就任しています。

◆初代校長大島義脩よしなが

ここで、第八高等学校初代校長に就任した大島について簡単に述べておきます。



初代校長 大島義脩
(1916年、『大島義脩伝』より)

大島は、一八七一（明治四）年に丹波国氷上郡（現在の兵庫県氷上市）で生まれました。少年時代に故郷を離れ、母親の実家がある東京に移った後、中学生時代を長崎の中学校と大阪（のちに京都に移転）の第三高等中学校（三高）で過ごしています。三高卒業後、大島は再び東京に戻って帝国大学文科大学哲学科に入学し、一八九四年には同哲学科を首席で卒業すると同時に帝国大学大学院に入学しています。

その後、第四高等学校教授、東京音楽学校長等を歴任した大島が、八高の初代校長に就任したのは三八歳のことでした。以後、一九一八（大正七）年に女子学習院長に就任するまでの一年間、大島校長は創意工夫をこらしながら草創期の八高の基盤づくりを意欲的に行っていました。指導教官制度、軍事教練と検閲（後述）、創立一〇周年記念祝賀式の挙行、学校付近に設けられた公認下宿、各種運動の奨励と選手制の否定（後述）などの大島校長の学校運営方策については、のちに「創意工夫に出た各種の制度組織その他は一つの新しい高校風を樹立し、後の新設高校のモデルになった点が少なくない」とされています。

◆ 第一回入学試験

戦前、官立高等学校の入学試験等に関する情報は『官報』に掲載されていました。第八高等学校創設後の一九〇八（明治四一）年四月一八日付『官報』には同年度の官立高等学校募集人員が告示され、八高の募集人員は合計二五一（第一部甲・乙類四二、丙類四二、第二部甲類一二三、乙類四四）名でした。なお、開校初年度は第一部と第二部の募集が行われただけで、第三部募集が行われたのは翌一九〇九年五月のことでした。

一方、同月二四日付『官報』には募集要項が掲載されました。八高の出願期日は七高とともに五月一五日までとされ、七高と八高の体格検査は五月三〇・三一日、同じく七高・八高の選抜試験は六月一日〜四日までとされました。これをうけて八高では、名古屋高等工業学校に入学試験事務所を設けて第一回入学試験を実施しました。

第一回入学試験では一三六五名の志願者があり、六月二〇日付『官報』で二五一名の入学許可者が掲載されています。また八高入学者の出身地は全体として四一府県に分布していました。が、出身地別の上位は愛知県三四名、兵庫県一九名、東京府一七名、大阪府一六名でした。

なお、八高生の出身地については、創設当初から地元愛知県が最も多く、大正期末から昭和期初めの三〇％台を除いておおむね二〇％台となっていました。

◆初年度授業の開始

第一回入学試験を終えた後、それまで文部省内に置かれていた第八高等学校の仮事務所が一九〇八（明治四一）年七月に愛知県会議事堂内へと移されました。また、同年九月一日には元県立第一中学校（名古屋市中東区外堀町）の校地・校舎を使用して八高が開校され、翌日には第一回入学式が挙行されました。

なお、八高の開校に先立って同年九月初めには名古屋市内の妙本寺（東区小川町）ほか六つの寺院に代用の学寮が設置されています。

仮校舎における八高の授業は、同年九月一四日から開始されました。これによって八高は、大島校長ほか一七名の教員スタッフのもと名実ともに旧制高等学校としての教育活動の第一歩を踏み出したのでした。

◆校舎等の新築と開校式

第八高等学校の本校舎建築は、一九〇八（明治四一）年五月に着工されました。翌一九〇九年九月、木造平屋建て六六一㎡の物理教室と木造二階建て六五四㎡の学寮（北寮）が完成し、その後の授業の一部は新築の物理教室でも行われました。そして同年一二月、八高は愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑に完成した新築校舎・学寮へと移転しました。



創設当時の校舎（『第八高等学校学寮史』より）

本校舎等の完成から約一年半後の一九一一年七月一日、八高の開校式と第一回卒業式が同時に挙行されました。

三、八高の教育と学生生活

◆学則からみる教育活動の概要

第八高等学校に三部がそろった一九〇九（明治四二）年度における学則に基づいて、八高の教育活動の概要をみておきます。学則は全十一章六六条で構成され、各章は「学科」「学年学期及休業」「入学及在学」「成績考查」「特待生」「授業料」「休学及退学」「懲戒」「校章及制服」「学寮」「図書及器械」となっています。

学則によると、毎学年は九月一日に始まって翌年九月一〇日に終わるものとされ、一学年三学期制（第一学期は9／11～12／24、第二学期は翌年1／8～3／31、第三学期は4／8～7／10）になっていました。また、入学者は、文部省令「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」に基づいて、入学志望段階で修業する部類を指定することになっており、部類ごとに志望者数が募集枠をこえた際に選抜試験が行われることになっていました。表1に同年度における部類と入学者の内訳を示しておきます。

なお、第一章で述べたように一九一八（大正七）年の新高等学校令によって高等学校高等科

表1 1909年度の部類と入学者内訳

部類	科	入学者数 (志望者数)
第1部甲類	英語法律科、政治科、経済科、商科	26 (72)
第1部乙類	英語文科	10 (18)
第1部丙類	独語法律科、政治科、独語文科	43 (66)
第2部甲類	工科	76 (227)
第2部乙類	理科、農科、医科のうち薬学科	40 (87)
第3部	医科	40 (283)

(『第八高等学校一覧』より作成)

は文科および理科の二学科制となり、部類制は廃止されました。また一九二一年からは四月入学制に改められ、翌一九二二年度から一学年二学期制に変更されました。

◆生徒心得にみる教育目的

第八高等学校の生徒心得は、一九〇八(明治四一)年九月に定められました。それは次のとおりです。

本校生徒タルモノハ特性ヲ涵養シ知能ヲ練磨シ以テ
国家有用ノ器材タランコトヲ期スヘシ居常守ルヘキ道
多端ナリト雖モ茲ニ其ノ標的トスヘキ大綱ヲ挙示ス
ルコト左ノ如シ

一、志操ヲ固クシ実行ヲ励ミ学業徳器ノ大成ヲ期ス
ヘキコト

二、身体精神ヲ鍛鍊修養シ剛健快活ノ氣象ヲ振起ス
ヘキコト

三、独ヲ慎ミ己ニ克チ忠信廉恥ノ心ヲ存スヘキコト

四、規律ヲ守リ責任ヲ重シきんかく謹恪きんかく重厚ノ風ヲ持スヘキコト

五、師長ヲ尊敬シテ温恭自虚ノ道ヲ尽クシ朋友ヲ親愛シテ協同融和ノ実ヲ挙クヘキコト

ここでは、八高生が日々めざすべき心得として、学業を成し遂げ人格を高めるという初心を忘れず実行すること、心身を鍛えてたくましくきびきびとした気性を養うこと、克己心をもつて二心なく忠実であること、規律を守り責任感をもち慎み敬う心を身につけること、目上の人を敬つて穏やかで慎み深くし友達との友情を深めて協力しあうことなどが示されています。

◆勤勉八高

第八高等学校の校風を理解する手がかりとして、以下では「勤勉八高」「教練八高」「スポーツ八高」という三つの観点から紹介しておきます。

表2は、一九一一（明治四四）年度と一九二一（大正一〇）年度の八高生の出席状況を示しています。八高生の出席率は、創設当初が平均九五％で、大正期以降も平均九四％程度であり、かなり良好であったとされています。ちなみに後者（一九二一年度）の授業日数・時数は、第一学年が一九四日・平均九七〇時間、第二学年が一九四日・平均九六八時間、第三学年が一八九

表 2 八高生の出席状況（1911および1921年度）

年度	区分 部・学科		出席すべき日数	出席延べ日数	出席率(%)
1911	第1部		47,390	44,705	94.3
	第2部		71,036	67,224	94.6
	第3部		25,018	24,077	96.2
1921	文科	第1年	22,698	21,880	96.4
		第2年	20,952	19,565	93.4
		第3年	20,979	18,857	89.9
	理科	第1年	30,846	29,703	96.3
		第2年	31,816	29,492	92.7
		第3年	22,836	21,235	93.0

(『第八高等学校一覧』より作成)

表 3 八高生の学年成績概況（1911および1921年度）

年度	区分 部・学科		進級 (卒業)	落第	休学	落第率 (%)
1911	第1部		198 (63)	20 (1)	12	8.7
	第2部		262 (75)	57 (6)	24	16.6
	第3部		100 (26)	10 (0)	14	8.0
1921	文科	第1年	116	1	4	0.8
		第2年	105	3	4	2.7
		第3年	(110)	1	3	0.9
	理科	第1年	148	11	7	6.6
		第2年	145	19	5	11.2
		第3年	(116)	6	4	4.8

(『第八高等学校一覧』より作成)

注) 1911年度における () 内は第3学年を内数で表示。

日・九八二時間でした。

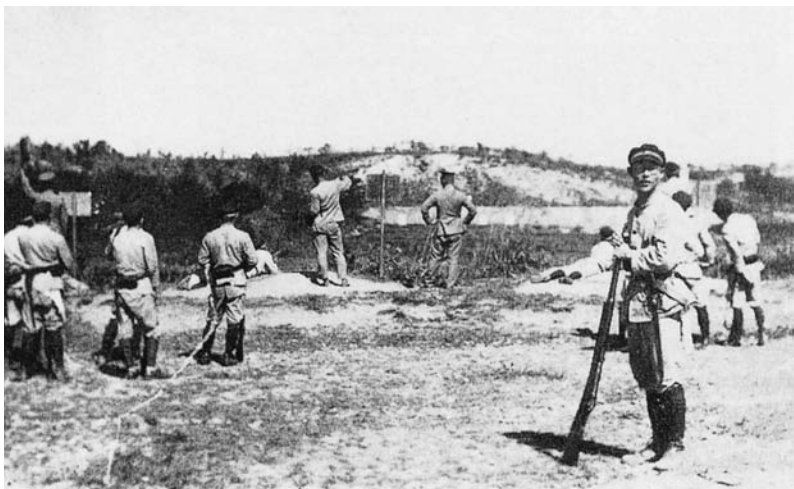
また表3は、同じく一九二一年度と一九二二年度の八高生の学年成績の概況を示しています。

いずれの年度にも休学者と落第者が存在しますが、総じて明治期より大正期の方が落第率は低く、また文科（第一部）と理科（第二・三部）では後者の方が落第率は高くなっています。こうした落第者の存在は、当時の八高における修学状況が厳しいものであったことを連想させます。

◆教練八高

旧制高等学校における軍事教練および現役将校らによる検閲講評の実施は、第八高等学校が初めて実施しました。のちに「教練八高」との異名を生んだこうした軍事教練は、「学校を国民的修養の道場と見做し、厳格な心身の鍛錬、国体的訓練の養成の重要なことを認めた」大島校長の創意によるものとされています。

『第八高等学校一覽（第二年度）』（一九一〇年刊）に収録された学則施行細則では「検閲ハ生徒隊規律ノ張弛志氣ノ振否服装ノ整否及教練ノ進歩ヲ検スル為メニ之ヲ行フ」とされており、教練は創設当初から実施されていたことがわかります。こうした教練は戦前期を通じて実施さ



小幡ヶ原での射撃訓練
(1923年、八高八十年祭記念誌『わが友 若き旅人よ』より)

れましたが、一九二一（大正一〇）年度の『第八高等学校一覽（第一四年度）』以降の学則施行細則には「野外演習及射撃演習」に関する諸規定が登場しています。

また、『大島義脩先生伝』（一九三九年刊）の中では、「軍隊生活を親しく経験した大島校長は、極めて真摯^{しんし}厳格な態度を以て自ら検閲にあたり、…（略）…体操授業視察の師団長の賞讃を博した程で、学問尊重と並行して教練には頗^{すこぶ}る熱心であつた」とも記されています。

◆スポーツ八高

第八高等学校では、創設時に全一一項目からなる「運動奨励ニ関スル方針」が定められました。その一部を次に示します。

運動奨励ニ関スル方針

- 一 運動ハ体育心育両全ヲ目的トス
 - 一 事情ノ許ス限り各種ノ運動ヲ均シク奨励ス
 - 一 全生徒ハ運動ニ参加シ各人常ニ一種以上ノ運動ヲ練習スルヲ例トス
 - 一 運動ノ為メニ学業ノ時間ヲ割カサルヘシ
 - 一 実力ノ養成ヲ主眼トシ競技上ノ勝敗ニ腐心セサルヘシ
 - 一 選手ヲ養成セス
- ：（以下略）

右の方針からは、競技上の勝敗にこだわることなく、心身ともにバランスのとれた発達をめざすための各種運動が積極的に奨励されていることがわかります。とりわけ「選手ヲ養成セス」との一項は、今日のレクリエーション・スポーツにも通じるものがあると思われますが、この規定に基づき八高では一九二一（大正一〇）年度までは選手制度が認められていませんでした。そのため、運動部は存在しても特定の選手は存在せず、対校試合なども有志を募って行うという形をとっていました。

八高に他校と同じような選手制度が導入されたのは、柴田徹心第三代校長が就任した翌年度

の一九二二年四月のことでした。これをうけて同年五月に八高は、東海学生野球大会に初めて正式な選手派遣を行っています。また、この選手制度の導入によって、のちに恒例となる第四高等学校（金沢）との対校試合（いわゆる「対四高戦」）が始められ、第八高等学校校友会に組織的な応援団も結成されました。

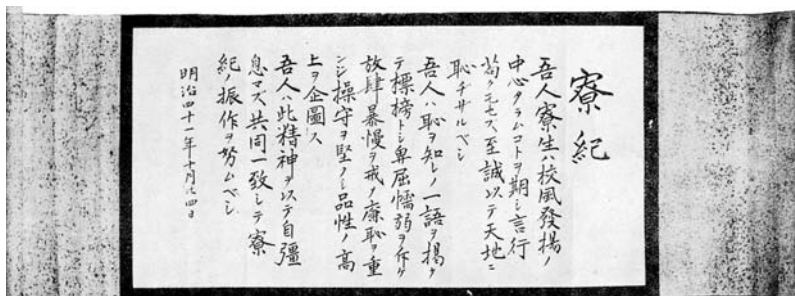
選手制度導入後の八高では、野球部、陸上競技部、庭球部、漕艇部など既存の運動部に加えて多くの運動部が創部されています。こうした八高運動部の活躍については、高橋義雄『名古屋大学 スポーツの歩み』（名大史ブックレット3）で触れられています。

◆寮紀の制定

第八高等学校の学寮は、一九〇八（明治四一）年一〇月に制定された寮紀をはじめとして、学寮生徒規約等に基づいて運営されていました。

寮 紀

吾人寮生ハ校風発揚ノ中心タランコトヲ期シ言行苟クモセス至誠以テ天地ニ愧チサルヘシ
吾人ハ恥ヲ知レノ一語ヲ掲ケテ標榜トシ卑屈懦弱^{だじゃく}ヲ斥ケ放肆^{ほうし}暴慢ヲ戒メ廉恥ヲ重ンシ操守
ヲ固クシ品性ノ向上ヲ企図ス



寮紀（『瑞寮史』より）

吾人ハ此精神ヲ以テ自^{じきよう}彊息マス共同一致シテ寮紀ノ振作ヲ努ムヘシ

ここには、八高の学寮生として、社会に恥じることがないように「恥を知れ」をモットーにして、剛健かつ誠実で節操を守ることによつて品性を高めようとするのが大切であり、すべての学寮生が協力してこのことに日々努力すべきことがうたわられています。

◆学寮に関する諸規定

一九〇九（明治四二）年度以降の第八高等学校学則には、学寮に関する一章が設けられています。そこでは、「学寮ハ生徒ヲ居住セシメ本校ノ教育ト相俟^{あいま}ツテ之ヲ訓育スル處トス」（学則第五〇条）と規定され、学寮生活も教育活動の一部であることが示されています。そして「新二入学生タル生徒ハ特別ノ事情ニ依リ通学ノ許可ヲ受ケタルモノ、外総テ学寮ニ入ルヘキモノトス」（同

五二条」とされ、原則として全寮制となっていました。なお、この全寮制については学則施行細則の「在学及休学」部分において、特別の事情によって通学を許可された者以外の「生徒ハ左記ノ一二該当スル者ヲ除ク外入学後一学年間ハ総テ学寮ニ入ルヘク其後ハ学寮又ハ本校公認下宿ニ入ルヘシ」とされています。

学寮については、前述の寮紀や学則のほかに学則施行細則、学寮細則、学寮生徒規約、入寮者心得などの諸規定が定められています。このうち学則施行細則には学寮に関する一章が設けられ、より具体的な諸規定がなされています。ここでは、「学寮生徒ハ生徒監指導ノ下ニ秩序ヲ保チ風紀ヲ維持スルヘシ」とされ、日常生活全般について生徒監による厳格な管理・指導を受けながら学寮生活を送ることが求められていました。

◆学寮規約

学寮規約については、学寮生徒が校長の認可を受けて制定・実行することが学寮細則で定められており、これに基づいて一九〇九（明治四二）年に最初のもの（全一一條）が制定されました。その後、同規約は一九二〇（大正九）年に「学寮自治」の樹立をめざして大きく改正されています。

ここでは、改正後の学寮規約に基づいて当時の学寮運営の一端を紹介します。同規約は全七

章五六条からなり、第一章第一条で「吾人ハ寮紀寮則ヲ守リ自治ノ精神ニ基キテ善美ナル校風ヲ発揚センコトヲ期ス」と定め、同第二条で「吾人寮生ハ実践躬行^{きやうこう}以テ寮内ノ秩序整頓ノ保持^{つと}ニ力ム」と定められています。

学寮には、寮生代表としての学寮委員が置かれます。この学寮委員が学寮全体の総括的な事務処理を行い、各部の委員とともにこの規約の実行を督励することとされています。ここにいる各部とは学寮内に設けられた炊事部・会計部・運動部・文芸部・衛生部・庭園部をさします。炊事部は、「炊事ハ学寮ノ自営トス」ならびに「在寮生ハ総テ本部ノ食事ヲトルベキモノトス」等の方針に基づいて設けられ、炊事部会計は独立会計として一般の会計部と区別されていました。運動部は、各種の運動・競技・旅行のほか「兔狩リ」等に関する事務を担当するとなっています。文芸部は、雑誌発行や寮歌、学寮演説会・講演会に関する事務を担当しました。

また学寮の各室には、室員代表としての室総代一名が置かれました。この室総代、各部幹事と学寮委員で構成されるのが室総代会議で、学寮規約の制定・改正のほか学寮に関する重要事項を協議・議決する場となりました。

◆寮歌「伊吹おろし」

名古屋大学が毎年発行する『学生便覧』には学生歌・応援歌・寮歌が掲載されています。こ

のうち寮歌は、「第八高等学校寮歌 伊吹おろし」（中山久作詞、三橋要次郎作曲）が紹介されています。

戦前、旧制高等学校の学寮では個性豊かな寮歌が数多く作られました。その数は約二五〇〇曲ともいわれています。が、正確な曲数は明らかではありません。

第八高等学校で最初に選定された寮歌は「殺伐の風」（大木俊輔作詞、今井坂雪作曲）で、一九一二（大正元）年のことでした。これ以後、八高でも寮歌選定が行われるようになり、翌一九一三年には新たに三曲が選定され、さらに一九一六年には寮内だけでなく校内一般に寮歌募集を行って優秀作品三曲を選定しています。前述した「伊吹おろし」は、この校内募集によつて翌一九一七年に選定された寮歌の一つです。同年、八高の寮歌が全部で八曲となったことを契機に、八高最初の寮歌集が刊行されています。この寮歌集の刊行は、「平静な当時の寮の内外に異常な感激を引き起した」といわれています。

なお、八高創立六〇周年記念事業が行われた一九六八（昭和四三）年に刊行された同記念事業実行委員会編『寮歌集』には、八高校歌・寮歌・応援歌など約一〇〇曲の歌詞・楽譜が収録されています。

第八高等学校寮歌



伊吹おろし

中山 久 作詞
三橋要次郎 作曲

第八高等学校寮歌

中山 久 作詞
三橋 要次郎 作曲

「伊吹おろし」

一、伊吹おろしの雪消えて
木曾の流れに囁けば
光に満てる国原の
春永劫に薫るかな

二、夕日あふれて草萌ゆる
瑞穂丘に佇めば
零れ地に咲く花葉にも
うら若き子は涙する

三、見よソロモンの栄耀も
野の白百合に及かざるを
路傍の花にゆき暮れて
果てなき夢の姿かな

四、花に滴る日の水沫
命の営みを語るとき
希望に湛さる若き頬を
はるかに星は照すなり

五、神秘の闇のおとずれに
いつしか寮の灯火は
瞬きそめて我を待つ
地上の夢よいざ去らば

六、春霧融けし丘の上
いづくともなく春をよぶ
歌やすらかに流れ来る
紺青の月影濃けれ

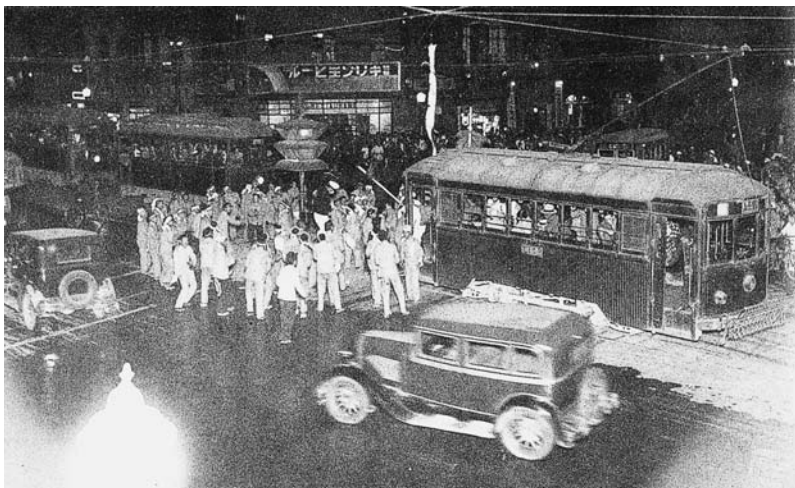
伊吹おろし（『名古屋大学学生便覧』より）

◆学寮での生活

第八高等学校第三代校長である芝田徹心は、(旧制)高等学校における学寮生活の意義について、旧制高校は人格教育を行って紳士を養成する場であり、この人格教育は人格の道德的修養を意味し、その人格修養には主観的方法によるものと客観的方法によるものがあるとした上で、次のように述べています(木村編『瑞寮史』はしがき)。

主観的(静的)修養は独自の工夫により研究によりて其の効果を挙ぐる事が出来るかも知れないが、客観的(動的)修養に至りては、結局人と人との接触交渉によつてのみ始めて体験し得らるゝことで、離群索居では勿論のこと、交友少き生活に於ては到底不可能のことである。学寮生活が高等学校教育中特別の意味を持つと云ふのは実に此の点に於てである。……(略)……斯くして学寮生活が人格の動的修養の上に多大の便益あることは殆ど疑ふ余地がないのである……(以下略)。

右のような学寮の意義づけは、八高に限らず多くの旧制高校においても同様であると思われる。ただし、実際の学寮生活では、前述の寮紀や学寮規約などの規則に縛られながらも、総じて自由奔放な生活が繰り広げられたようです。



「ストーム、市電を止める」(1933年、『わが友 若き旅人よ』より)

◆ストーム

『広辞苑(第五版)』によると、「学校の寄宿舎などで、夜、大勢が歌を高唱したりして騒々しく練り歩くこと」と説明されています。現在においても一部の高校や大学などの行事に「ストーム」という名称は継承されているようですが、旧制高校当時のストームは現在のものとは趣が異なります。

第八高等学校の場合でも、『瑞寮史』『第八高等学校学寮史』など当時の学寮生活を記した書物を見ると、八高創設直後の代用学寮の頃からストームが行われており、年を追うごとにストームは頻繁かつ激しく行われるようになっていきます。特に昭和初期においては、日常的な小規模なストームのみならず、大規模なストームが行われることがあったようです。たとえば、一九二八(昭

和三)年に創立二〇周年記念祭の際に行われたストームは、八高運動場で始められた全校コンパが盛り上がり、校外にあふれ出し、ついには市街地中心部の栄町交差点でデカンショ踊りとなつて名古屋駅にまで至つたとのことで、これが街上ストームの始まりであるといわれています。また一九三二年には、北寮と南寮との間で「無破壊と統制を理想としてゐた八高ストームの伝統」を傷つけると評された「大破壊ストーム」が行われ、翌年にも名古屋市内繁華街の交差点で市電を止めるようなストームが行われるといったことがありました。

◆漫画帖「八高生のぞ記」

第八高等学校の学生生活をコミカルなタッチで紹介した資料に、漫画帖「八高生のぞ記」があります。全二四点のはがきサイズの漫画を収録した「八高生のぞ記」は、昭和期初めの「自由と友情と青春を謳歌する八高生の生態」を見事に描き出しています。次頁に、そのいくつかを紹介しておきます。



5. デカシヨ踊り

デカンシヨ デカンシヨで 死ぬ迄踊れ コリヤコリヤ
俺が死んだら 子が踊る ヨーイ ヨーイ デカンシヨ
デカンシヨ踊りを観たすゝば、出鶴目ダンスだ。バット
一本とデカンシヨを知っていれば、御合衆方にも踊れます
よ。嘘だと思ったら、お母さんの御留守に踊って御覧なさい。

6. 寮 雨

時間と努力の経済のために、我輩等最も卓越せる人格者は寮雨と称する至極便利な方法で、身を軽くし、以って青春を最も有効に費そうとする。夏の夜など階下で勉強に余念のない折、微風は送られて来る妙なる香り……なんの、二階の野郎が又寮雨してやアがる。畜生！

寮雨漸々裸もと寒し コリヤコリヤ

月が見かねて雲がくれ

ヨーイ ヨーイ デカンシヨ



1. 入 寮

「君！ 大分荷物が重いやうですね持ってあげましょうか？」

「エ、有難う」などと渡したら敗内、ダニのやうにくっついて、「是非××に退入って呉れ給へ」と来る。新入生を勧誘するのに各運動部員の活躍は目覚ましいものである。

8. 寮 歌 合 唱

見よソロモンの栄耀も
野の白百合に及かざるを
路傍の花にゆき暮れて
はてなき夢の姿かな

てな寮歌を怒鳴り出すと疲れた頭も暫した気もけし飛んで爽快になる。俺達の休息法の一つだ。



四、戦時下の八高

◆戦時体制と「思想善導」

一九三一（昭和六）年の「満州事変」を契機に、わが国の軍部や政府は中国大陆への侵略を正当化して挙国一致体制の完成をめざすようになりました。この時期、文部省内に設置されていた学生思想問題調査委員会が学生生徒の「左傾」化の原因と対策についての答申をまとめ、「マルキシズムに対抗するに足る理論体系の建設を目的とする、有力なる研究機関を設けること」を提案しています。これをうけた文部省は、ただちに国民精神文化研究所を設置するとともに、各地方に日本精神を研究・講習する国民精神文化講習所を設置させ、国民の思想統制を図るようになりました。また、一九三六年に文部省思想局は、高等学校生徒の「思想善導」を目的として一九三〇年から実施していた特別講義を「日本文化講義」として拡充強化する措置を行いました。この日本文化講義は、「広く人文ノ各方面ヨリ日本文化ニ関スル講義ヲ課シ以テ国民的性格ノ涵養及日本精神ノ発揚ニ資スルト共ニ日本独特ノ学問、文化ニ関スル十分ナル理解体認ヲ得シムル」ことが目的とされました。

文部省の直轄学校である第八高等学校や名古屋高等商業学校では、一般の学科目に準じて年間五回計一〇時間の日本文化講義を行い、講義終了後は文部省に遅滞なく報告を行うこととされています。八高の場合、日本文化講義は一九三六年度に三回、一九三七年度に五回、一九三八年度に四回、一九三九年度に四回、一九四〇年度に三回、一九四一年度に三回がそれぞれ行われました。

◆学徒動員

戦時体制の下では、働き盛りを迎えた青年・壮年男子の労働力が軍隊に動員されるため、不足した労働力の補給源として学生・生徒への勤労動員（学徒動員）が行われました。一九三八（昭和一三）年六月に「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」が通牒されて中等学校以上の学生・生徒の集団的勤労作業が初めて実施されています。当初は夏休みの期間に三日または五日という規模で実施された勤労作業でしたが、翌年に「漸次恒久化」の方針が出されて一九四一年の時点では通常の授業に振り替える形で年間三〇日以内の勤労作業が行われるようになります。なお、こうした学徒動員は次第に動員期間が延長され、一九四三年には「在学期間中一年二付概ネ三分ノ一相当期間」とされ、一九四四年以降は「原則トシテ中等学校程度以上ノ学生生徒ハ総テ今後一年、常時コレヲ勤勞其ノ他非常任務ニ出動セシメ得ル」こととされました。

第八高等学校での集団的勤労作業は、一九三八年八月二七日から三日間の日程で行われました。八高の全校生徒は毎朝六時半に集合して「国旗掲揚、君ヶ代奉唱、皇居遥拝、校長の訓示など厳粛な式」を行った後に、第一学年が千種陸軍兵器廠での雑役労働、その他の学年が校内での土運びや草取り労働を行ったとの記録があります。

◆勤労作業のための学徒海外派遣

一九三九（昭和一四）年の七月～八月、全国二三四校の大学・高等専門学校などの学生・生徒約三六〇〇名で組織された興亜青年労働報国隊学生生徒隊が、勤労作業のために「満州」その他の中国各地に派遣されました。

この報国隊には八高からも近藤康信教授と生徒五名が参加しました。これらの参加者は、事前に茨城県内の訓練所で特別訓練を受けたのち七月二〇日きゅうじように宮城・明治神宮の参拝を済ませて派遣地へ出発しています。

このとき教官として参加した近藤教授は、のちに学徒海外派遣について「第一回の学生海外派遣は、…（略）…無謀とも云うべき杜撰な計画で行われた。かけた費用は莫大であつたろうが、それを償うほど労力が役に立ったかどうかは不明で、これも恐らく学生の時局認識を促す手段として行われたのであろう」と回顧しています。

◆出陣学徒壮行会

一九四三（昭和一八）年一〇月、それまで特権的に認められていた学生・生徒の徴兵猶予の措置が全面的に取り消されることになりました。これによつて二〇歳をこえた学生・生徒は、ただちに徴兵検査を受けて一二月一日（陸軍関係）および一二月一〇日（海軍関係）に入営することが命じられたのでした。ただし、理工系の学生については、同年一月一三日の陸軍省令によつて、修学継続のための入営延期が認められました。

同年一〇月、東京の明治神宮外苑競技場で文部省主催の出陣学徒壮行会が開催されました。当日、八高の生徒は学校の運動場でラジオ放送による出陣学徒壮行会を体験したとされています。実際の八高における出陣学徒壮行会は、翌月の一月二〇日に行われました。壮行会の当日は、授業を二時間行つたのちに講堂で二年生入隊者への仮卒業証書授与式が行われ、その後運動場で壮行式が行われました。また式後、武装行進で熱田神宮に参拝し、全員が堵^{とれ}列して着剣執銃する前で校長が武運長久の祈願文を読み、宮司からの激励を受けたのち夕方に学校へ戻つたとされています。

◆修業年限の短縮

一九四一（昭和一六）年一〇月、勅令第九二四号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨

時短縮ニ関スル件」が公布されました。これは、大学学部の在学年限や大学予科・高等学校高等科・専門学校・実業専門学校の修業年限を当分の間、それぞれ六ヶ月以内で短縮することを定めたものでした。

実際に一九四二年度には六ヶ月間の繰り上げが実施され、第八高等学校の修業年限も二年半となりました。さらに、一九四三年度には高等学校令が改正され、修学年限はさらに六ヶ月短縮されて高等学校の修業年限は二年間とされました。

こうした二度にわたる修業年限の短縮措置にともなう学年暦にも変更が加えられ、授業日数の減少を最小限にとどめるため、従来の二学期制が三学期制（第一期は4/1～8/20、第二期は8/21～12/31、第三期は1/1～3/31）へと変更され、夏休み期間も一ヶ月に短縮されています。

◆空襲による被災

当時、軍需産業の中心地でもあった愛知県では、一九四四（昭和一九）年末から繰り返されるようになった空襲によつて名古屋市・豊橋市・岡崎市・一宮市などの市街地を中心にきわめて大きな被害を受けました。

この頃、第八高等学校の生徒は勤労働員として軍需工場等での勤労作業を行っています。一



戦災後の八高正門付近（1945年、『わが友 若き旅人よ』より）

九四四年一二月の頃は、第二学年・第三学年の生徒全員が市内の軍需工場で作業を行い、第一学年の生徒は交代で三重県内の高原地で馬鈴薯栽培作業を行っていました。

一九四五年三月一二日、八高はB29の焼夷弾攻撃によって炎上しました。これは、全国的にみても高等学校では「第一着の戦災学校」であつたとされています。このときのようなすは次のように伝えられています（作道・江藤編『伊吹おろしの雪消えて』）。

学寮に居合わせた人員は勤労働員出動中とあつてわずかに数名、北教室あたりより火を発しみるみるうちにひろがり構内のすべてをくれないに包んだ。かけつけた教職員、生徒、町内の人びとも、炎上する八高を目前にしてなすすべも

知らず、わずかに南寮、体育館を守るのが精いっぱいの有様であった。翌日になり屋根から入った火のため図書館が燃えだし、書庫は二日間にわたり燃え続けた。

この後、八高は同月一九日と二五日にも空襲によつて被災しました。そして最終的に学校の敷地内で焼け残ったものは学寮の南寮・柔道場・集会所・病室と体育館だけでした。なおその間、二〇日には焼け残った体育館で、校旗も卒業証書もない形だけの卒業式（第三六回）が行われています。

五、名古屋大学への包括

◆終戦直後の八高

一九四五（昭和二〇）年三月の空襲によって校舎の大半を失った第八高等学校は、そのままの状態で八月一五日の終戦を迎えました。政府は、終戦直後から学徒動員の解除など戦時教育体制を平時に復帰させる措置を行いました。同年八月二八日、「時局ノ変転ニ伴フ学校教育ニ関スル件」が発せられ、すべての学校での授業再開が指示されています。

八高では、名古屋市内と市外に分散する形で授業が再開されました。市内の生徒は、焼け残った体育館や熱田中学校・尾張中学校・愛知県商業学校などの校舎の一部を借りて授業が行われています。また市外の生徒は知多郡河和町の全忠寺を宿舍としながら河和町南部国民学校で授業が行われています。

◆河和町校舎への移転

市内瑞穂区瑞穂町のほとんどの校舎の焼失した第八高等学校は、一九四六（昭和二一）年九



河和町校舎の全景（1946年、『わが友 若き旅人よ』より）

月に知多郡河和町の旧海軍第一航空隊跡地に全面移転を行いました。しかし、「元軍施設とあつて学業にも種々の不便があり、そのうえ名古屋からの通学には大きな困難が伴い、住宅難：（略）：等の理由から、早くも名古屋市内復帰の声があがり、翌一九四七年一月には八高の教師・生徒が第八高等学校復興委員会を結成し、復興資金の獲得運動を始めています。同復興委員会（委員長は栗田元次校長）は、四月からの授業開始をめざして、河和町校舎を瑞穂町の焼け跡に移築することを計画していました。

しかし、こうした復興運動が始まった直後の一月一四日、河和町校舎の中寮・南寮・本館・ホールなど四棟が失火によって全焼してしまいました。ところが移築予定の校舎を失ったことで挫折するかと思われた復興運動は、同窓会組織による母校

復興緊急同窓会の開催や熱田中学校有志による資金寄付、瑞穂連区町内会長会による復帰のための促進後援会の結成など多くの人々や愛知県・名古屋市からの支援を受けたことによって、遅滞することなく逆に強力に推し進められたのでした。

◆瑞穂町への再移転

一九四七（昭和二二）年三月、河和町校舎を瑞穂町へ移築するための契約が工事業者との間で結ばれました。その半年後の九月一七日、新校舎の竣工祝賀式が行われました。その夜には校庭で「復興と青春を謳歌して」ファイヤー・ストームも行われています。

図3として、復興後の八高敷地および建物配置図を示しておきます。

◆新学制への移行と名古屋大学第八高等学校

一九四七（昭和二二）年三月、教育基本法と学校教育法が公布・施行されました。前者は戦前教育の最高基準とされたいわゆる教育勅語（一八九〇年）に代わるものとして、後者は日本国憲法と教育基本法の理念をうけていわゆる六・三・三・四制の学校教育制度の基本を定めたものです。

戦後の日本では、原則として、この学校教育法の施行によって旧制から新制への学制移行が

行われました。

一九四九年五月三十一日、国立学校設置法という法律が公布・施行されました。この法律によつて全国六九校の新制国立大学が設置され、前述の学校教育法の施行後は旧制名古屋大学として存在していた本学も新たに新制名古屋大学として発足したのでした。

この新制名古屋大学の発足は、第八高等学校の制度上の位置づけを変更するものでもありません。ここで旧制の高等教育機関から新制の高等教育機関への制度的移行の詳細を説明する余裕はありませんが、新制大学の設置は、多くの場合、旧制の高等教育機関が包括されることが前提となっていました。新制名古屋大学の場合は、旧制名古屋大学、第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校などが包括されています。これによつて八高は、正式名称が名古屋大学第八高等学校へと改められました。

新制名古屋大学への包括にともなつて八高の敷地・校舎には名古屋大学の教養部も置かれ、名古屋大学瑞穂分校と呼ばれるようになりました。この瑞穂分校では旧八高の学寮も含めて、新制名大の教養部学生と旧制八高の生徒がともに学生生活をおくる場になっていたのです。

◆最後の卒業式——八高の廃止

一九五〇（昭和二五）年二月四日、第八高等学校最後の第四〇回卒業式が挙行されました。



八高門標の取り外し（1950年、『八高五十年誌』より）

この日、最後の卒業証書を授与された生徒は、女性一名を含む三七五（文科一二七、理科二四八）名でした。

この最後の卒業式の後、八高の教授たちが正門前に集まって門標「第八高等学校」の取り外しに立ち会ったといわれています。一九五〇年三月三十一日、国立学校設置法の一部改正が行われ、名古屋大学の包括学校から第八高等学校の名称が削除されました。ここに明治・大正・昭和の各時代を経た第八高等学校は、四十二年におよぶ歴史に終止符が打たれたのでした。

六、八高会―第八高等学校同窓会―

◆第八高等学校同窓会

これまで本書では第八高等学校のあゆみについて述べてきましたが、本章では八高の同窓会組織について触れておきたいと思います。

第八高等学校同窓会は、一九一一（明治四四）年七月、第一回卒業生が八高を巣立つと同時に設立されました。その会則は全一四ヶ条で、冒頭の数ヶ条は次のとおりです（『第八高等学校一覧（第四年度）』）。

第一条 本会ハ会員相互ノ和親ヲ謀リ併セテ母校トノ関係ヲ密接ナラシムルヲ以テ目的トス

第二条 本会ハ第八高等学校同窓会ト称ス

第三条 本会ハ本部ヲ第八高等学校内ニ置き適當ノ地ニ支部ヲ設ク

第四条 本会々員ヲ分チテ左ノ二種トス

普通会員

一、本校卒業生

特別会員

一、本校校長教官及管テ校長教官タリシモノ

一、其他本校ニ縁故アルモノニシテ理事会ノ推薦ニ依ルモノ

…(略)…

この八高同窓会の設立は、大島初代校長の発案によるもので、「当時高等学校では卒業生のことごとくが大学へ進学していく関係から高等学校の同窓会は未だ存在せず本校同窓会がその最初の試みであった」とされています（作道・江藤編『伊吹おろしの雪消えて』）。本同窓会の業務は主に二つあり、一つは会員の消息や八高に関する情報を知らせるために年一回会報を発行すること、もう一つは毎年七月に八高で総会を開催することとされていました。

なお、この第八高等学校同窓会については資料がほとんど残されていないため、具体的な活動内容やいつまで存続していたのかについても詳細は不明です。

◆八高会

八高会は、戦後第八高等学校が廃止された一九五〇（昭和二五）年八月、八高卒業生によつ

て東京に設立された同窓会（田中直通初代会長）で、設立当初から会報『瑞陵』を刊行しています。

一方、一九五四年六月には名古屋八高会（神野金之助初代会長）が設立されました。名古屋八高会の会報『やつるぎ』は、同会設立から二ヶ月後の同年八月に刊行されました。『やつるぎ』創刊号には、「名古屋八高会盛大に発足」との見出しと五〇〇名が参加した「発会式」のようすを写した紙面半分サイズの写真が第一面を飾っています。

さらに、一九六七年一月には関西八高会（川本良吉初代会長）が発足しました。

以後、八高会（東京）・名古屋八高会・関西八高会のほかにも各地区の卒業生が八高会を創設し、各八高会が独自の活動を行う時期が続きました。

◆一つの八高会

二〇〇一（平成一三）年六月、八高会（東京）・名古屋八高会・関西八高会等の各八高会が一本化され、新たに八高会として設立されました。各地区で活動する複数の八高会を統合しようとする気運は、「八高会は一つであり、一つでなければならない」という八高卒業生の思いが生み出したものであったといわれています。

新しい八高会の本部と事務局は、母校の地である名古屋市内に置かれました。また、この統

合を期に『瑞陵』（全五八五号）と『やつるぎ』（全五三三号）の各会報は終刊となり、新たに一本化された会報『伊吹おろし』が創刊されています。なお、この創刊号は『やつるぎ』の号数を継承して『伊吹おろし』第五三四号として毎月一日に発行され、二〇〇七年一月現在で第七五号（通巻六〇八号）まで発行されています。

八高会は、一九五八（昭和三三）年に開催した八高創立五〇年祭をはじめとして、その後も八高創立の周年行事を定期的に開催するとともに、次に示すような記念刊行物を発行しています（カッコ内は発行年）。これらの刊行物は、かつての旧制高校「八高」の姿やその文化を今日に伝えるものとして、今後ますますその存在価値が高まっていくものであると思います。

『八高五十年誌』（一九五八）、『瑞穂丘物語』（一九六八）、『八高寮寮歌集』（一九七八）、『八高七十年祭』（一九七九）、『わが友 若き旅人よ』（一九八八）、『第八高等学校寮歌集』（同）、『忘るる勿れ丘の日を』（同）、『八高の先生がた』（一九九二）、『八高同窓生著作目録』（一九九三）、『やまはるか かくもうかび（八高創立九十年祭記念誌）』（二〇〇〇）

おわりに

本書では、名古屋大学の包括学校の一つである第八高等学校について述べてきました。

二〇〇三（平成一五）年に『旧制高校物語』を刊行した秦郁彦氏は、旧制高等学校が近年の日本においてなお強烈な存在感をみせていると指摘し、その理由を次のように述べています。すなわち第一に、戦前の六・五・三・三制の学校体系が戦後の六・三・三・四制に改革される過程において、旧制高校だけが完全に消滅してしまったことへの哀惜の思いがあること。第二に、旧制高校は帝国大学の予科的性格をもち、語学を中心とする一般教養に重点をおいたカリキュラムをゆとりたつぷりに消化できたこと。第三に、すぐれた教師陣によるマンツーマンに近い教育を実施するとともに、生徒の大半が学寮生活の中で切磋琢磨しつつ友情を育てる環境があったこと。そして何よりも旧制高校が同年代男子青少年の１％にも満たないエリートを養成する機関であったことを指摘しています。本書が描いた第八高等学校がこの指摘に即したものであったかどうかについては、読者の判断に委ねたいと思います。

本書では、ごく限られた紙数で第八高等学校を描くことが求められました。八高を含む旧制

高等学校が廃止されてから六〇年近い歳月が流れようとしています。こうした時期に刊行される本書が取り上げるべき事項は実に多岐にわたるものだと思いますが、本書の性格上取り上げることができなかったものは数え切れません。そうした事項については、読者各位において巻末に掲げた主要参考文献等を参照いただきたいと思います。

主要参考文献

- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一・二（名古屋大学、一九九五年）
- 旧制高等学校資料保存会編『資料集成 旧制高等学校全書』（昭和出版、一九八五年）
- 秦郁彦『旧制高校物語』（文春新書、二〇〇三年）
- 木村忠二郎編『瑞寮史』（第八高等学校学寮文芸部、一九二六年）
- 大島先生記念会『大島義脩先生伝』（同記念会、一九三九年）
- 松木亮編『第八高等学校学寮史』（第八高等学校学寮、一九三四年）
- 八高創立五十年記念事業実行委員会編『八高五十年誌』（同実行委員会、一九五八年）
- 作道好男・江藤武人編『伊吹おろしの雪消えて』（財界評論新社、一九七三年）
- 八高創立八十年祭実行委員会編『わが友 若き旅人よ』（同実行委員会、一九八八年）
- 角田美弘『八高追憶―旧制高校生活回想―』（私家版、二〇〇三年）

著者略歴

山口 拓史（やまぐち たくじ）

一九六二年 兵庫県生まれ

一九九四年 名古屋大学大学院教育学
研究科博士課程（後期課程）単位取得
退学

現在 名古屋大学文書資料室助手
専攻 高等教育史

名大史ブックレット¹²

第八高等学校

——新制名古屋大学の包括学校①——

二〇〇七年三月三〇日 第一刷発行

著 者 山口 拓史

編集発行 名古屋大学文書資料室

〒464-8601 名古屋市中千種区不老町
電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市中熱田区桜田町一九一二〇
電話 〇五二（八七一）九一九〇

名大史ブックレット

シリーズ 既刊本

-
- | | | | |
|---|-------------------|-------|-----------|
| ① | これまでの大学院・これからの大学院 | 山口 拓史 | 2000年12月刊 |
|---|-------------------|-------|-----------|
-
- | | | | |
|---|-----------------------|------|----------|
| ② | 名古屋大学 キャンパスの歴史1 (学部編) | 神谷 智 | 2001年2月刊 |
|---|-----------------------|------|----------|
-
- | | | | |
|---|---------------|-------|----------|
| ③ | 名古屋大学 スポーツの歩み | 高橋 義雄 | 2001年3月刊 |
|---|---------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|------------------------|-----------|-----------|
| ④ | 豊田講堂と古川図書館—名古屋大学の寄付建物— | 堀田典裕・木方十根 | 2001年12月刊 |
|---|------------------------|-----------|-----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------------|-------|----------|
| ⑤ | 名古屋大学最初の外国人教師—ヨングハンス先生とローレツ先生— | 加藤 鉦治 | 2002年3月刊 |
|---|--------------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------|------|----------|
| ⑥ | 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治 | 神谷 智 | 2003年3月刊 |
|---|--------------------|------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------|-------|----------|
| ⑦ | 名大祭—四〇年のあゆみ— | 山口 拓史 | 2003年3月刊 |
|---|--------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|-------------------------|-------|----------|
| ⑧ | 岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③— | 山口 拓史 | 2004年3月刊 |
|---|-------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|----------------------------------|-------|----------|
| ⑨ | 豊田講堂— <i>Toyoda Auditorium</i> — | 山口 拓史 | 2004年9月刊 |
|---|----------------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------|-------|----------|
| ⑩ | 名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②— | 堀田慎一郎 | 2005年3月刊 |
|---|--------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|----------------------------|-------|----------|
| ⑪ | 農学部の誕生と安城キャンパス—学部の誕生と草創期①— | 堀田慎一郎 | 2006年3月刊 |
|---|----------------------------|-------|----------|
-



表紙写真 : 八高正門 (現在の明治村正門)
裏表紙写真 : 八高正門の門標部分